学校教育実践コース（英語専修）
イギリス文学史

「イギリス文学史」の授業評価報告書

英語教育講座　竹永雄二

1. 授業の目的

英語教師の教養として，イギリス文学の歴史についての基本的知識を得る。特に Shakespeare(劇)、Dickens（小説）、Wordsworth（詩）を中心とする主要な作家の作品の抜粋を読み，イギリス古典文学作品に対する鑑賞力を高める。

2. 到達目標

(1)英語教師の教養として、イギリス文学の歴史について基本的な知識を得る。(知識)

(2)代表的作品の抜粋を原文で読み、鑑賞力を高める。(理解)

(3)多様な視点から作品を読み解く力を高める。（視点、思考）

(4)児童文学の多読により，持続的な読書の習慣を身につける。(関心，姿勢)

3. 前年度からの持続的取り組み

今年度は前年度の授業改善の取り組みの継続である。

1)児童文学の多読

平易な作品を自分の力で楽しんで読み、持続的な多読の習慣を身につけさせることを目的として、授業開始から１０分間を黙読の時間に充てた。選んだ作品はダイアナ・ジョーンズ作『ハウルの動く城』である。この作品を選んだ理由は、宮崎駿氏の映画化でよく知られており，受講生に楽しんで読んでもらえるのではと予測したからである。多読の英語力向上への効果については、既に Krashen(1985)等の研究によって実証されている。彼の研究によれば、特にリーディング力、語彙力，文法力，スペリング力の向上に効果があると言われている。さらに作品のコンテクストから、次の展開を予測する力の向上に効果があると言われている。予測する力の向上は作品を読むスピードアップつながる。このようなことが全体的にうまく機能すれば、楽しく読むことで英語力を向上させ、多読に対して積極的な姿勢を形成できるのではと期待した。１回の授業で用意した分量は作品の８頁で、B4 用紙１枚に両面コピーして、毎回授業の開始時に配布した。黙読ではあるが主体的な読解作業は一つのアクティブ・ラーニングにもなっている。また読み残した箇所は授業外で読むことで，授業外学習の時間の増加につながることも期待された。

2)日本語の文学史の教科書の使用

昨年度に続き，内容理解を容易にするためと全体像を掴みやすくするために日本語のテキストを使用した。重要な作品を扱う場合には，作品の原文抜粋を資料として用意し，作品鑑賞に今までより多くの時間を充てるようにした。

4. 学生の評価

授業の 15 回目に、授業評価アンケートを行った。ここでは上記の２点に絞ってアンケート内容と結果をあげる。

1) アンケート内容と結果（回答者１７名）

授業者の作った調査項目への評価（一部）

①強くそう思う
②まあそう思う
③どちらとも言えない
④あまりそう思わない
⑤全くそう思わない

1.多読は有意義であったと思いますか。

①	②	③	④	⑤

1	14	0	2	0

2.多読の教材は適切であったと思いますか。

0	12	3	1	1

3.多読を今後も継続して行こうと思いますか。

6	5	5	2	1

4.この授業は有意義であったと思いますか。

0	10	5	2	0

5.興味を引く作家作品があったと思いますか。

①	②	③	④	⑤
5	10	0	2	0

6.継続して作品を読んで行こうと思いましたか。

2	8	5	2	0

7.教員の説明は適切でしたか。

5	9	2	1	0

8.この授業の目的・目標は達成されたと思いますか。

0	12	4	1	0

----------自由記述----------

・多読をする際に，映像がその補助となった。
・ 多読の試みは楽しかった。「ハウルの動く城」がとても好きになった。
・ 「ハウルの動く城」の原文を読むことにより，多読の習慣がついた。
・ 多読をする際に，映像がその補助となった。
・イギリス文学の中でも学生が興味を持ちそうな作品を扱っていた。
・シェイクスピアの作品をグループに分けて発表するという内容が特に面白かった。
・シェイクスピアの文学に触れることができ，文学への興味が深まった。
・好きな本を多読教材として読みたかった。
・テストが難しい。時間が足りない。
・説明を聞くばかりで単調だった。
・一方的な教授スタイルだったので、学生がより参加できるものの方がよい。

5. 今後の改善に向けて

改善点 1

今回は多読教材として *Howl's Moving Castel* を使用したが，予想以上に英語が高度で，読んで楽しめるところまでは行かなかったと思われる。一般的に言われている通り、学生が身につけている英語力より若干易しい教材を慎重に選択すべきであった。

改善点 2

多読への関心を高めるために，また内容理解の補助になるように、に映画版を使用した。これは狙い通りで一定の効果があったが，その他の点で工夫が足りなかった。何か効果的ヒントによる支援を行う必要がある。

改善点 3

授業の前半では，参加型の活動を取り入れ、特にシャイクスピアの劇を扱った際には，グループ分けしてグループごとに作品を指定し、学生に作品を紹介してもらう活動を取り入れた。自由記述のコメントにもあったが，それなりの効果的活動となったと思われる。ただ授業の後半は，これも自由記述で指摘されているように，説明ばかりに流れてしまった。受講者が積極的に参加できるような活動の工夫が必要である。

改善点 4

最終テストの内容についても再検討する必要がある。作品，作家，時代背景に関する知識を等問題だけになってしまったようだ。原作の英語に対する理解力、鑑賞力等の問題を増やす必要がある。

改善点 5

「イギリス文学史」はカリキュラム上、英語免許状取得のための必修科目として位置づけられているので，英語教育とのつながりを明確にしていく取り組みがまだ不足している。国際的共通語としての英語の重要性に留まらず、人の心を動かし、生きていく力を与えてくれる，英語の力強さ，美しさを伝えていけるような工夫と努力が必要である。